虚構

樹上の仏陀(一)

袴谷憲昭

一

その車輛の中には私ども二人以外にはだれもいなかった。前後の数輛先を見回してもかなり遠くに若干の人影をやっと見つけることができるような異様な電車の状況であった。普段はあまり聞いたこともないような電車の線路を過る音が私の古い記憶を惹起したせいか、忽如として私の脳裏には朔太郎の詩があった。

わが故郷に帰れる日
汽車は烈風の中を突き行けり。
ひとり車窓に目醒むれば
汽笛は闇に吠え叫び
炎焔(ほのほ)は平野を明るくせり。
まだ上州の山は見えずや。
夜汽車の仄暗き車燈の影に
母なき子供等は眠り泣き
ひそかに皆わが憂愁を探(さぐ)れるなり。
嗚呼(ああ)また都を逃れ来て
何所(いずこ)の家郷に行かむとするぞ。
過去は寂寥の谷に連なり
未来は絶望の岸に向へり。
砂礫(されき)のごとき人生かな！
われ既に勇気おとろへ
暗憺として長(とこし)なへに生きるに倦(う)みたり。
いかんぞ故郷に独り帰り
さびしくまた利根川の岸に立たんや。
汽車は曠野を走り行き
自然の荒寥たる意志の彼岸に
人の憤怒(いきどほり)を烈しくせり。

「昭和四年の冬、妻と離別し二児を抱へて故郷に帰る」と

いう題詞まで私ははっきりと思い出すことができたが、旧制高等学校時分に私は朔太郎の詩を随分と愛唱し、東京から郷里の能登へ帰る時には、必ずといってよいほど、『永島』にあるこの「帰郷」を口遊んでいたものである。

一瞬、こんな半世紀ほども昔のことが、まざまざと私の脳裏を過ったのであるが、私はその時、ポール＝クリストファーというアメリカの教授を私の先輩の先生宅に案内する途上にあった。一九八九年一月八日の午後のことである。前日に昭和天皇が崩御し、元号が平成に改ったその当日であり、普通ならこんな日になにも外出する必要はないのだが、暮れのうちに来日していたクリストファー教授とは、旧年中にこの日の約束ができあがってしまっていた。訪問先は、その年の夏に開催されるクリストファー教授主催のアメリカの仏教学会に既に招待参加が決まっていた田中元和教授のお宅であった。お宅は都心より東の近郊にあったが、午前中に電話を入れると予定を変更する必要はないとのことだったので、私どもは約束どおり青山で落ち合った。外は二日続きの雨であったが、その日は松の内も明けた最初の日曜日だったから、通常なら街も賑わっているだろうに、この日ばかりは通りも死んだようにひっそりと静まり返っていた。この異常な静粛は、この前年の秋の天皇の容体急変以降から加速度的に国中を覆ってしまい、暮れに来日した日本通のクリストファー教授は、この異様な状況の理由を知悉していたので、この件では車中でもそれほど話題にしたわけではないが、日本に対する外交辞令を踏まえた上で、同教授もこの奇妙な雰囲気には多少批判的な言辞も折り込んでいたのである。私は、車中だれもいない上に話が英語だったということもあって、なにも遠慮することはない、これが「克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世世厥ノ美ヲ済セル」日本人の通弊なのだと、多少自虐的に、今も忘れることのない『教育勅語』の一節をわざわざ日本語で朗読してから、「国体の精華」などという言葉を英語で説明したり、その日から施行された元号の「平成」の意味を解説したりした。田中教授のお宅では、お正月の例年どおりの御節料理をお酒と共に御馳走になり、仕事の上では夏の会議のことを確認したくらいのものでほとんどは雑談であったが、比較的早めにおいとましてその日は終った。

しかし、それが私の「平成」の始まりでもあった。こんな奇妙な書き方をするのも、私の人生は文字どおり「昭和」から始まったからである。実は、私は、余り例がないので大抵の人は驚くのであるが、昭和元年十二月二十五日に生まれた。知ってのとおり、この日に「昭和」は始まったのである。勿論、生まれた年を覚えているものはいないが、私は、いつとはなしに、私の生まれた翌昭和二年七月二十四日に芥川龍之介が自殺したことを意識するようになった。恐らく、この事

件の衝撃は私の田舎の身辺にさえ及んでいたのだと思う。あるいは、芥川の自殺が象徴的に時代のなにかの終りを告げているように田舎のすみずみにまで感じられたといった方がよいのかもしれないが、私はそんな「昭和」を生きてきたのである。「昭和」の終るほぼ二年前の昭和六十二年三月には都内の国立大学を定年退官し、その時にもなにか「昭和」は終ったような気持ちになったものだが、実際の終焉は、クリストファー教授のお蔭とでもいうべきか、妙な記憶によって鮮明に印象づけらることになってしまった。

それからもう六年になり、退官してからは八年になる。退官後は、非常な好運に恵まれて、都内の仏教系の私立大学に務めることができて今日に至っている。余計な詮索をされても困るので、名乗っておけば、私の名前は平山茂道である。田舎の中学校から一高に入った時は、輪島中学始まって以来の秀才と称され結構自分もその気になっていたが、来てみると四修で入ってきた仲間も意外にいることがわかったし、東京育ちのスマートな連中には生涯かなわないという気持を植えつけられてしまった。私も田舎では結構秀才扱いされ、それが当然のようにも振舞っていたが、内心での私の憧れは眉目秀麗の本当の秀才のイメージであった。私の脳裏には幼少の頃から植えつけられていた芥川のイメージがずうっとあったのかもしれない。額広く鼻筋通り顎細く白皙長身——言ってしまえば陳腐この上ない表現かもしれないが、私自身はこういうイメージと掛け離れた人間であることを断えずひと一倍意識しながら生きてきたのであった。それだけに、東京へ出て来て、自分の同期に私のイメージ通りの秀才が一人でもいれば、私の容姿コンプレックスが凝り固まってしまうには充分だったのである。来年の誕生日がくれば満で七十歳にもなるという既に禿げてしまった男がいまだにこんなことを言っているのは甚だ奇妙なことかもしれないが、私の経験からすれば、容姿コンプレックスが人を偏屈にも依怙地にもすることは大いにありうることだと思っている。

私が高等学校に入った年は昭和十八年であるが、その年の十月二十一日に明治神宮外苑競技場であの出陣学徒壮行会が開かれたのである。やはりあの日も雨であった。私は敢えて寮に留まってやがて自分の身にも降り懸かってくるにちがいない時代の波を予感していた。幸い戦はその二年後に終ったが、高等学校にも大学にもこの戦争の傷跡は深く残った。しかし、戦後は食糧も物資も極端に乏しかったとはいえ、希望のありがたさは噛み締めることができた。私が大学に入学したのは昭和二十二年であったが、最終的には専攻を印度哲学に決めた。高等学校の時は、既にラテン語やギリシア語にも通じているような友人を目の前にして、対抗意識から、私も西洋古典を学ぼうとした時期があり実際興味を持ってもいた

のであるが、大学に進んでからは語学畑を経由して次第に哲学の方へ傾斜しついには印度哲学科で仏教を研究することに決意したのである。

田舎では私はむしろ文学青年あった。ところが、実家は能登の古い農家だったということもあって浄土真宗の門徒であったのに、母方の伯父に四高を出た曹洞宗の住職がいて、この伯父が文学などはやめて仏教の研究者にでもなるように機会あるたびに私に勧めていたのである。四高出身ということもあってこの伯父は西田幾多郎や鈴木大拙に私淑していたが、私はそれが嫌いで伯父には随分反発したものの、結局はそういう方面に進まざるをえなくなったのは皮肉な結果であった。私自身は文学を止めてしまったわけではないのであるが、自分には文学で食っていく才能がないのではないかということが徐々に自覚されていくにつれて、大学に残るという道の方を私は次第に安全弁として選ぶようになっていったのかもしれない。従って、私は、これからの日本には仏教の研究が必要だと戦前から口癖のように主張していた伯父の言うことを真面目に聞いたわけではなく、大学に残るためには仏教研究を選ぶ方が有利かもしれないという私なりの打算が働いていたことの方が私の進路決定には大きな影響を持っていたような気がするのである。

私が大学を出たのは昭和二十五年であったが、卒業後も大学院に籍は置いて、二年後の夏にフルブライトの奨学金を得てアメリカのペンシルバニヤ大学東洋学科に留学した。インドへ行くという話もあったのであるが、これはどうも私の気が進まず実現しなかった。約二年間の留学を終えて帰国した私は、翌年の昭和三十年三月二十九日に結婚した。次の年の十二月二日には長男が生まれ、女房に似て眉目秀麗に育ち、頭もよかったと期待したのだが、中学校の途中からは教育を拒絶すればこうなるというような生き方をして満二十歳になる年の夏に夭死してしまった。これは私ども夫婦を一挙にどん底へ突き落としたが、それも一種の安らぎだったかもしれないと思う。しかし、当時のことは今でも書けないし、また書くべき機会でもないと思っている。帰国後は、研究所の嘱託や私立大学の専任講師を経て、長男の亡くなる六年前の昭和四十五年には母校の助教授に迎えられていたが、その昭和四十五年は、前年に中止となった大学入試を挟んで、大学紛争が急速に下火に向っていた時期であった。長男の死んだ昭和五十一年には学生自身も早や大学紛争には関係ないというような顔つきをするようになっていた。私は昭和五十二年に教授になったのであるが、その二年後には共通一次試験が始めて導入されたのである。そこから学生気質もどんどんと変っていったような気がするが、私は自分の考えとは悉く反対な事態にも厳しく対処することなくただ手を拱いて今日まで

生き続けてきたような思いがして仕方がない。

私と同年生まれで高等学校から大学へと過したものは、すぐ上の先輩たちと違って戦争へ駆り出されることもなく済んだかわりに、戦後の民主主義教育の時代にも既に成人してしまっており、新しい価値観のもとに成長し出した後輩たちともまた違って、なにか前後の世代から取り残されたような感覚を持っている場合が少なくないかもしれない。特に私は性格的なこともあるのか、そういう感覚は強いようである。若い時には西欧至上主義的なところがあったにもかかわらず、それがいつのまにか仏教の研究者になってしまったために、余計私には中途半端な感覚が残っているのかもしれない。しかし、最近は、そんな感覚をいつまでも持ち続けたような気になってうじうじ過していても仕方がないのではないかと思うようになり、むしろ積極的に若い時分に戻ろうと努めている。数年も前からは、大学院の授業においてさえ、ギリシア語やラテン語の資料をキリスト教がらみで使ったりしているほどである。

しかし、私自身が仏教の研究を適当に処理しているのだなどとは思わないでもらいたい。私は、文系の学問について、仏教にせよ、文学にせよ、哲学にせよ、歴史にせよ、古典学にせよ、私どもの先輩が築き上げてきたものに比べると、自分がいかにも中途半端であると感じることは否定できないが、彼らが育ててきた西欧至上主義的側面はわたしの世代にもまだ充分受け嗣がれていることと思う。ただし、こういう言い方をすると、やはり世代が古いと片付けられてしまうのであろうが、学問や教育上における西欧至上主義的な側面は、やはり旧制高等学校の廃止と共に消えてしまったのではないかと考えられるのである。確かに、教育上の新制度と共に、学問を西欧の成果の紹介や受け売りと心得るような悪弊は減ったが、実用的な学問がそのまま独創的な学問であるかのごとき錯覚が増えてきたようにも私には思われる、フィールドワークを中心とした人類学や実証的宗教学がそういった戦後の文系の学問傾向を代表しているであろうが、私はそれをアメリカにおいても実感した。私が留学中に一緒に研究した仲間の多くは、日本の旧制で学んだ私ほどにもラテン語やギリシア語を知らなかったが、それは別に驚くほどのことでもなかったのである。しかし、アメリカの研究者の場合には、ヨーロッパ的伝統に囚われない創意工夫とそれに賭けるエネルギーのすさまじさを感じ取ることができたが、日本はただ、真似る相手をヨーロッパからアメリカに変えたのみで、やはり模倣の域を出ないことには違いはないように見受けられる。それなら、いっそのこと、西欧至上主義的な教養をしっかりと身につけている方がまだましなような気がしてくるのである。ただ、こうなるとずんずんと老いの繰言めいてくるのを

自分でも意識せざるをえないのであるが、今、大学および大学関係のことを責任をもって仕切っている人に、旧制出の人はほとんどおるまい。私学でさえ、学長職にあるような人もほとんどは新制出の人であろう。しかも、そういう人たちのもとで、大学設置基準の改正も施行され、大学は専門教育を学生が飽きずに面白く興味をもって頭に叩き込めるよう教授するところに変っていくようなのである。私のような旧人類がついて行けるようなところでは到底ない。

後一年勤めれば、私は今の大学を定年で辞めることになるだろうが、だからといって私は捨て台詞を残したいと思っているわけでもなく、自分より若い世代に皮肉を言い残したいわけでもない。これでも結構私は真剣に大学の将来を憂慮しているつもりなのであるが、次に述べる話も、その面での私の気持の現われであると理解してもらえれば幸いである。私の大学では、今年も例年どおり三月二十五日に卒業式が行われたが、今年は三月二十日に地下鉄サリン事件、二日後にはオウム真理教に対する捜査当局の強制捜索が開始された直後ということもあって、学長も祝詞中でそのことに触れないわけにはいかなかったのであろう。一連の事件をその教団に特定して喋ったわけではなかったが、本来は人間のエゴの追求を押えていくべきはずの宗教が、自分たちさえ救われれば他人はどうなってもよいという生き方をしたのでは大変危険なことになるという例話に、学長は、ドストエーフスキイの『地下生活者の手記』の一節を取り出したのである。私は大学院の委員長という役職上の立場から壇上にあって、学長のやや後方でその話を聞いていたが、ドストエーフスキイに触れた行りはおよそ次のごとくではなかったかと思う。

確か随分昔、学生時代に米川正夫氏の翻訳で読んだと思うのですが、ドストエーフスキイは『地下生活者の手記』という小説の中で、主人公のホームレスの男に、「毎朝一杯のお茶が飲めるとあらば、他人などどうなってもいい…」というようなことを語らせていたはずです。毎朝飲める一杯のお茶というのは、自分だけの欲望の充足です。「他人」というのは、家族であり、友人であり、同国人であり、世界の人々でしょう。誰であれ、自分以外のすべての人です。そして、動物たちや自然環境、さらには神、仏までを含んでもいいと私は考えています。

その主人公の言わんとしていることは、つまり、自分の欲望さえ満足させれば、他人、他者はどうでもいい、という思想ですが、これはエゴです。エゴは結局は、自分を孤独にし、信じ愛するものを失わせます。

たかが卒業式の祝詞だと思えば目くじらを立てるほどのことでもないとは重々承知の上のことなのだが、彼は、文学部から立って選ばれた学長で、世代的にいえば、私より五つほ

ど後輩の、新制に切り変わった直後の大学の経験者である。彼とは、同じ大学を出たということもあって、私が今の大学へ再就職する時にも間接的には随分と世話にもなっているらしいのだが、私にはどうも彼の楽観的な人道主義が肌に合わず、普段はむしろ互いに敬して遠ざけあっている関係にある。私から見れば、彼ほどドストエーフスキイと無縁に感じられる男もそう沢山はいないのだが、その彼がドストエーフスキイに言及したので、私は余計驚いてしまったのかもしれない。『地下生活者の手記』がルソー流の「自然と真理の人（l'homme de la nature et de la vérité）」に諍ってものされたものであることは有名な話だが、私とすれば、「自然と真理の人」がまことに単純な意味において主人公とドストエーフスキイを同一視してそれをエゴの名のもとに簡単に葬り去ってしまったようにしか聞こえてこなかったのである。恐らく、学長は、『地下生活者の手記』さえちゃんとは読んでいないのだろうが、それにしても主人公をホームレスと呼んだのは、本人にしてみれば比喩のつもりかもしれないにせよ、非道すぎると感じた。読んでいればわかることだが、『地下生活者の手記』の主人公は、四十歳の八等文官で、「去年遠い親戚の一人が六千ルーブリの金を遺言して死んでくれたので」「自分の小さな片隅に閉じこもってしまった」男で、ペテルブルグの場末に田舎出の婆さんの女中と共に住んでいる。その男が自分の二十四、五歳の頃の、貧乏ではあるがアポロンという下男までいる時期の数日のことを思い出して書いたものが、その手記の主要部分をなしているのである。主人公は、一夜いかがわしい娼家で、ある女とベットを共にするが、この女が後日突然主人公の家を訪ねて来ることになる。その時、主人公がリーザというこの女に語った話の一場面に、学長が言わんとした例話も出てくるのである。今その箇所と思われるものを、米川正夫氏の翻訳に従って、そのまま抜き書いておいてみよう。

ぼくは人から迷惑をかけられないためには、今すぐ世界じゅうを一コペイカに売り飛ばしたって平気だ。世界が破滅するのと、このぼくが茶を飲めないのと、どっちが一大事かと思う？　その答、――世界は破滅しても、ぼくはいつでも茶を飲まなくちゃいけないんだ。きみはそれを知っていたかね、どうだね？　まあ、こういうわけで、ぼくは自分が穢らわしい卑怯者で、利己主義のなまけ者だってことを、自分で承知しているのだ。現にこの二、三日というもの、きみがやって来はしないかと、おっかなくってふるえていた始末だ。

しかし、主人公が自分の悪を洗い浚いぶちまけてしまったために事態は一転する。このように場面が急転直下変ってしまう直前の重要な話の一節が右に引用した、学長の言ったと

ころの「一杯のお茶」の話なのだが、どう事態が一転したかについては、私の要約などよりは、実際に主人公の語っているのを聞いた方がよいであろう。引用がかなり長くなって恐縮であるが、実際に読んでいない人も多いと思われるので、多少我慢して付き合ってもらいたい。

けれど、そのとき不意に奇妙なことが起こった。

わたしはなんでもすべて書物式にものを考えたり、空想したりする習慣がついてしまって、自分が以前空想の中で創作したようなふうに、現実のことを想像する癖があったので、その時もこの奇妙な状況をすぐに悟ることができなかったくらいである。それはほかでもない、わたしのために圧倒的な侮辱を受けたリーザは、わたしが想像したよりも、ずっと多くのことを理解したのである。彼女はいま見聞きしたいっさいのことから、真心から愛する女がいつも真っさきに悟ることを悟ったのだ。つまり、わたし自身が不仕合わせな人間だということである。

彼女の顔に現われた恐怖と侮辱感は、まず悲痛な驚きに代わった。わたしが自分を穢らわしい卑劣漢などと罵って、さめざめと涙を流しはじめたとき（わたしはこの長ぜりふの初めから終りまで、泣き泣きしゃべったのである）、彼女の顔ぜんたいが痙攣にひん曲がった。彼女は立ちあがって、わたしを押しとめようとしたのである。やがてわたしが話し終わったとき、彼女が気に止めたのは、「なぜお前はここにいるのだ、なぜ帰らないのだ！」というわたしの叫びではなく、わたし自身これを口に出すのが、さぞかし苦しいに相違ないということだった。それに、彼女はかわいそうなほどいじめられた女で、わたしより無限に劣った人間だと、自分から思い込んでいたのだから、侮辱を感じたり腹を立てたりするわけがない。彼女はなにか抑えきれない衝動に駆られたように、とつぜん椅子から跳りあがった。わたしのほうへ飛びつきたそうな気持ちを、全身にあらわしつつも、やはりまだおずおずして、その場を動くのをためらいながら、わたしのほうへ両手をさし伸べた……と、わたしも胸の中がひっくりかえったような気がした。そのとき彼女はやにわにわたしに飛びかかって、両手でわたしの頸を抱きしめながら、泣き入ったのである。わたしもやはり我慢しきれないで、かつて覚えぬほど烈しく慟哭した。

「ぼくは善良な人間に……なれないのだ……人がならしてくれないのだ！」わたしはやっとのことでこういうと、長いすのところまで辿りつき、その上へ俯伏しにぶっ倒れたまま、十五分ばかり本物のヒステリイを起こして、慟哭をつづけたのである。彼女はひしとわたしに寄り添って、わたしの体を抱きかかえたまま、その抱擁の中で麻痺したかのように思われた。

しかし、主人公は再び憎悪に支配されて彼女を徹底的に侮辱してしまうことになる。やがて打ち拉がれた彼女は主人公のもとを去る。ところが、去った後のテーブルに、彼女の手に握らせたと思っていた五ルーブリ札を見つけて、主人公はまるで狂ったかのように後を追う。外は霏々として降り積もる静かな雪の夜である。彼女を見失った主人公の頭を次のような妄想が駆け巡る。

『もし彼女が永久に侮辱をいだきながら去って行ったら、いっそそのほうがよくはないだろうか？侮辱というやつ、――これは実際、一種の浄化作用なんだからな。これは何より辛辣、痛烈な意識なんだからな！　おれは明日にもさっそくあの女の魂を穢して、あの女の心を疲憊させるかもしれないんだ。ところが、こうすれば、侮辱はけっしてあの女の心の中で消えることがない。そして、どんなにいまわしい穢れがあの女を待ち設けているにもせよ、この侮辱は……憎悪の力であの女を高め、浄化するだろう……ふむ……ことによったら、赦罪の力によって、といったほうがいいかもしれない……だが、しかし、そのためにあの女がらくになるとでもいうのか？』

まったく真面面な話、今度はもうわたしが諸君に一つの質問を提出するが、安価な幸福と高められた苦悩と、いったいどちらがいいだろう？　さあ、答えてみたまえ、どちらがいいか？

「生きた生活」から遠ざかって「地下生活者的空想」の中でいつもこのようなことばかり考えている主人公の「一杯のお茶」の話を、利己主義の名のもとに、私たちは果して簡単に葬り去ることができるのであろうか。しかし、この現代にあっては、いとも簡単に「安価な幸福」を選んでしまう「自然と真理の人」は多いようなのである。もっとも、いくら「自然と真理の人」が多かろうとも、学長のように、根っからの人道主義者であり博愛主義者であるならば、なんの害毒を流すわけでもないから、特別問題にする必要はない。私が我慢できないのは、「安価な幸福」を楽しむ「自然と真理の人」でありながら、いかにも狂気の世界を理解しているように振舞っている、所謂「宗教学者」と称せられている人種である。

先日も、ふと手にした会社の管理者向けみたいような総合雑誌に、学長より二年ほど若い折曲道雄という宗教学者が、オウム真理教の正体がだれの目にもはっきりしてきたのではないかと思われるこの時期の真最中に、次のような呑気なことを書いているのを知って呆気に取られてしまった。

それにしても、一体、オウム真理教の麻原教祖は、今後どのような運命を辿るのか。イエスのように、世間のさげすみを受け、一片の同情も注がれることなく、重い十字架を背負ってゴルゴダの丘をのぼっていくのだろうか。もし

もそのイエス＝キリストがこの日本に復活したら、ひょっとかして「麻原よ、汝はもう一人のイエスなり」というかもしれない。

それとも、麻原教祖は、サリン事件の犯罪者という「極重の悪人」のレッテルを貼られ、地獄に落ちた挙句の果てに、母親を幽閉し父親を殺した阿闍世王が釈尊によって救われたように、仏の救済の手に抱きとめられるときがくるのだろうか。もしもその仏陀がこの日本に現われてきたら、思わず口をすべらせて「麻原よ、汝もまたわが仏弟子の一人なり」というかもしれない。

引用中の後段は、この宗教学者が述べんとする親鸞の悪人正機説に絡んでいく伏線なのだが、こんな延長線上で悪人正機説が語られたのでは親鸞も閉口してしまうよりほかはないだろう。それにしても、こんな明々白々たる極悪非道にまで広い理解を示したがごとき人道主義は金輪際止めにしてもらいたいと思うのだが、前段ではこの教祖がイエスにさえ重ね合わされている始末である。思うに、最近の我が国の宗教学者には、神を神とも思わない人が多いので、いとも容易にイエスが引き合いに出される場合も少なしとはしない。そういえば、折曲氏よりも更に若い今流行の宗教学者である中道真一氏が、ある大学に不採用になった時に、あろうことか、自分をゴルゴダの丘にのぼっていくイエスに擬えたことのあったのを思い出すのである。その中道氏は、「狂気」がなければ宗教じゃないというようなテーマで麻原教祖と対談し、彼の神秘体験を本物であると高く評価したことがあるので、今や批判に晒されているようだが、こういう質の人は、過去にどんな言葉を垂れ流そうとも、一種の記憶喪失者だから、決して反省することはない。それは、現在もなお、平然と同じような言葉を垂れ流しているのを見れば明らかなことである。聞けば、中道氏は東大卒の宗教学者との触れ込みらしいが、言い古されていても真実の格率には従っておいた方がよい。レッテルの権威主義によって人を判断する必要は全くないのである。しかし、この種の権威主義が、ひところの日本よりも今の方が却って猛威を揮っているように感じられることもないわけではない。勿論、私ども旧制の時代にも大いにそういう傾向はあったが、レッテルの権威主義によって人を判断するような連中は仲間のうちでは最も軽蔑された。こういう言い方をすると非常に嫌われたし今でも嫌われると思うが、一高生は大抵アンチ一高だったのである。実際問題として言えば、中道氏程度の「知性」の東大生は極普通に沢山いるのだと認識すれば、東大を出たのにオウム真理教に走ったのはおかしいとかそこへ転落したのは信じられないとかという、それこそおかしいものの言い方は少なくなるであろう。

ところで、レッテルを貼って人を評価するという点からい

えば、昔は、かかる評価の仕方から最も遠くにいた人が小説家ではなかったろうかと思われる。しかし、最近では様相も一変して、小説家が偉そうな顔をしてまるでなにかの権威でもあるかのように人にレッテルを貼っている場面に遭遇することが多くなってきた。昨年も私の学部の中年の一教授が、女流作家の中曾根文子氏にこっ酷く非難されているという話を聞いて、実際その文を読んでみたのだが、明確な理由も示さないまま、我が教授を「日本語の読解力を身につけて頂かないと、このままでは中学生以下の読み取り方である」などと一方的に決めつけている。中味のないただの非難めいたレッテルであるから、恐れる必要もないし、だいいちこんな人を真面に相手にしたら泥沼に嵌まってしまうぞ、などと当時その教授に会った時には言っていたものだが、最近このような決めつけ方がこの人の常套手段なのだということがわかった。最近出たばかりのある雑誌によれば、そこで中曾根氏を批判している当時十七歳の看護学校生は、ある政治家が骨折して厄介になった車イスの自分の姿を「ぶざまな格好だが」と言ったのに対して抗議の手紙を書き、政治家も謝罪の返事をくれて、両者は和解したのだという。ところが、これを報じた新聞記事を見た中曾根氏は、我が教授を非難したのと同じ雑誌の昨年九月号で、この和解の話にわざわざしゃしゃり出て来て、この高校生のことを、「日本語を知らない」とか、「自分が人道的に大変いいことをしたと思ってしまったのだろう」とか、「読書の絶対量が足りない」とか、「高校生以下の国語力しかない」とか言って決めつけたのだそうである。よくこれで小説家が務まると思うくらいワンパターンで紋切型の非難の言葉で私などは恐れ入ってしまうが、それは私が我が同僚に対する非難を読んでいたせいかもしれないにしても、まるでワープロかパソコンで非難の言葉まで同じものが入力されているかのように見える。しかし、安易な人道主義者に対しては、どんな差別的用語を用いてでも堂々と批判してやるくらいに思っている中曾根氏は一向に怯む様子もない。それどころか、世の差別用語刈り的な雰囲気に対しては敵愾心を丸出しにしているような始末である。小説家に対して、その小説を余り読まずに評論文めいたものだけで判断するのもどうかとは思うが、この方の小説は、私の取っている新聞に連載された『天上の黒』というのだけは読んだことがある。博愛主義の女学生が長じて老年になっても同じような文章を書いていれば、そのような小説の方が迎えられる世の中に現代はなっているのかというのが連載当時の感想であった。

もっとも、差別用語刈り的な今の社会の風潮に対しては私自身も苦しめられ反対でもあるのだが、余り勇ましく振舞う人はなかなか信用する気になれない。数年前、大穴貴之氏は『法学部勝礼教授』というパロデー小説を書いて評判になっ

たが、その冗舌なパロデーは、大学に対する世間的評価の下落に便乗しただけにすぎない鬱憤晴しのように私には感じられた。その後、この小説家は、自分の小説に関する差別用語刈り的な非難に遭遇して、あっさりとしかも勇ましくも断筆宣言を行って、目下俳優業に精を出しているようであるが、あのような行動は、私には、小説家らしからぬ単なる蛮勇のように見えて仕方がない。私は、「暴虎馮河、死して悔い無き者は、吾れ与(とも)にせざるなり。必ずや事に臨みて懼れ、謀りごとを好んで成る者なり。」という孔子の言葉の方が好きである。それはともかくとして、大穴氏はもうなにも書いていないのかと思っていたらそうでもないようで、オカルトじみたテレビ番組の自作自演みたいなことはやっているらしい。昨年の暮れであったか、「最後の喫煙者」とかいうドラマでは、自ら最後の喫煙者に扮して世界中の禁煙主義者からいじめられ抜いて死ぬという役柄を演じていたが、大穴氏はなにかとんでもないところで勘違いしているのではあるまいか。喫煙者という強者を、煙には肉体的にもすぐ参ってしまうような弱者の禁煙主義者が寄って集って最後の一人までいじめ抜いたからといって、数の大小で強者と弱者とが入れ替るようなことではないはずである。そもそも数を頼めば弱者が強者になるという発想自体がおかしい。弱者は弱者であり、強者は強者でなければならないのである。それにもかかわらず強者がその本質を少しも改めることなくただ多数のものにいじめられている振りをするだけで弱者になれるという奇妙な理屈が罷り通るから、言いたい放題の中道氏がゴルゴダの丘にのぼっていくイエスになりきったような気持に漬ることにもなる。しかも、そんな中道氏を少しもおかしいとは思わない世間の通俗性を本能的に身につけている麻原教祖などは、中道氏と通底して自分もイエスになりすまし、自分たちの方こそサリンなどの毒ガスでいじめられているとイケシャアシャアと言う始末である。それをまた、中道氏が宗教とは反権力的なものであり反社会的なものであると持ち上げるのを見ていると、悪人同士の掛け合い万歳を見ているようなのだが、だれもその二人を強者の悪人だとはっきり断定するようなこともしない。みんな多かれ少かれ大穴氏みたいような人になってしまっているのであろう。

さて、どうやら私は、つまらない小説家だけを取り上げて文句を言っているような格好になってしまったが、勿論私はそんなことがしたいわけなのではない。第一、私は、この五十年程、現代日本の作家の書いた小説などほとんど本腰を入れて読んだこともないから、私にはそもそも文句をいう資格さえないのである。昨年、ノーベル文学賞をもらった大江健三郎氏のデビュー当時のものは、世の評判のままに数点は人並みに興味をもって読んだことはあるが、大江氏の西欧崇拝

といわれる側面はともかくとして、同氏が受賞時にも口にしていた戦後民主主義というものには、私が依怙地なせいなのか、どうも素直になれない。あるいは、それは私どもの世代的負目でもあるのか、民主主義には大いに敬意を払わねばならないという気持がある一方で、民主主義とは所詮政治的な用語であろうというような蟠りがどうしても残ってしまうのである。しかし、私は、社会が民主的になることには大いに賛成であるし、私の実感するところでも、戦後二十年ほどは、経済復興の進捗と共に、確かに若々しい戦後民主主義の息吹きは感じられたように思う。その点では、反って今の方が民主主義も停滞しているであろう。政界や官界の汚職事件などを見ていると特にそういう感懐も深いが、そんな気持をもつのも私が年を取ってきているせいなのかもしれない。なにも昔が善くて今が悪いということはないからである。ただ、そういう点でいうと、この近代化しているはずの日本において、ある信用組合の莫大な金額の不当融資問題に関与していた一人の政治家が、政治上の責任はなんら取ろうとさえしなかったにもかかわらず、その長男が大麻所持で逮捕されるやすぐ議員を辞職したというような話を聞くと、この相も変らぬ後進性は一体なんなのかと思ってしまうのである。しかし、あまり投げ遣りにならない方がよいのであろうし、私も大江氏に倣っておきたいが、私は大江氏の文学も深くは知らず、まして や今の若い世代を代表するような村上春樹氏や吉本ばなな氏などの作品は読んだこともない。私は率直に、戦後民主主義を積極的に生きようとしてきたわけではないこと、また戦後の文学についてもほとんど知らないことを白状しておいた方がよいと思う。

もっとも、私は、歴史は、その時代がどんなに後退しているかに見えようとも、決して後退しているのではなく必ず前進しているのだと信じたいと願っているが、自分自身の歴史となるとどうしてもそういうわけにはいかず、年とともについつい自分の二十歳のころを人生のピークのように思ってしまう。特に私は、田舎から出てきてから、文学好きに拍車がかかったということもあって、ギリシア語やラテン語まで既に知悉しているような仲間に対抗心を燃しながらフランス文学やロシア文学に沈潜していた頃が自分の黄金時代であったように思えてならない。その時代から、私は、学者になろうという決意と共に転落してきたのではないかといつのころからか思い定めており、その観念を振り払うことがどうしてもできなくなってしまっている。その私が今更昔に戻ることのできぬことは百も承知の上なのではあるが、私が学者になろうという決意と共に手掛けてきた仏教研究のことをいつまでもマイナスに考えていてもなにも得るようなことはないと思うようになってきたのである。私は、若い時にさえ小説は書

いてみたこともないが、そう思うようになってから、ふと小説を書いてみたいという気持も涌くようになった。最初にそんな気持になったのは、後数年で退官になろうかという時期であったと思う。その頃、私は、ふとした縁で、真中継彦という作家の『樹下のブッダ』という小説を手にすることになったのである。その単行本で出た小説は、もともとは、その時点より十数年前に雑誌に発表されたものに大幅に加筆したもののようであったが、仏教研究者の私から見ればいろいろな問題点を含むものであった。しかし、私が当時一番言いたかったことは、それらの問題がいちいち正確ではないということよりも、仏教の開祖に対する真中氏の見方が根本的に誤っているということだったのである。例えば、真中氏は、釈尊に「私は無意味な苦行より退転したのである」と言わしめており、それは一般的に言って正しいと認められることなのであるが、その釈尊が苦行主義を否定して考えたはずの状況が、真中氏によっては次のように描写されている。

悉達多は七日七夜の間菩提樹の下で結跏趺坐を続けた。彼自身は場所を知らず時を知らず結跏趺坐という名さえ知らなかった。ただいつものように足を組んで坐り、その上に手で印を形どり、半眼にして背筋を伸ばして静かに瞑想していた。彼は耳に聞こえる鳥の声にも鼻に触れる自分の匂いにもなにものにも乱されず、全く自然にまかせながら、胃に入った乳粥が血に変わり、涸れ尽きんとしていた血の河が再び勢いよく流れ出すのを感じていた。血は肉に変じ、全身に力が満ちていくのを感じながら、あたかも、母胎のなかで次第に成長していく嬰児のように、一が二に裂けて、耳と声が裂け、鼻と匂いが裂け、眼と外界が裂けて、突如として暁天に輝く明星を見たとき、悉達多には、「私は星を見ている」という知が生じた。――それは釈尊が出家してより六年後の三十五歳の冬のことであった。

これでは、仏教の出発点は、釈尊の「私は星を見ている」という知にあったということになるが、仏教でいう知性とは決してそのようなものではない。確かに、中国において積極的に採用されていくようになったある種の仏典には明けの明星を見て大悟したというような記述も認められるのであるが、このような記述に乗っかっていったのでは釈尊が苦行主義を否定したことの意味は決して理解されることがないのである。それに、この真中氏の記述には、仏教というよりは、禅の「父母未生以前の一句」という公案によってでも考えているような趣きがあって、仏教の最も秀れた特質である二者択一的知性の働きが少しも感じられない。私の率直な印象を言わせてもらえるならば、真中氏のこの『樹下のブッダ』は、まるで樹の下を這いずり回る、感触だけしかない蚯蚓のような釈尊を描いているにすぎない。しかし、そんな手厳しいことも言

えないであろうから、自分が小説を書いてみたらとその時は思ったのである。

だが、当時は、いまだ一度も経験したことのないものへはなかなか腰も重く、しかも研究者仲間にはただ笑われるだけだとの思いもあって、退官後になってから暇を見つけてやってみようと先送りの形になった。とはいえ、実際退官してみると、そんなこともなくてずるずると今日までほぼ十年近くも経ってしまったが、ただ、真中氏の『樹下のブッダ』を読んだ直後に、釈尊の苦行に従って郷里以来釈尊と行動を共にした五人の仲間の一人アッサジが私に語りかけるような夢を見たことがあり、私が小説を書く時にはアッサジを語り手にすればよいということはなんとなく決めていたのである。アッサジが後に釈尊の弟子として重きをなすに至ったサーリプッタに縁起法頌を教え彼を釈尊に紹介するという話は真中氏の小説でも扱われているが、私が書けば、釈尊も樹の下の蚯蚓のようでは決してありえないから、題名は、真中氏のそれを皮肉って『樹上の仏陀』にしようとは、これまたその当時から決めていたことであった。

さて、いよいよ、その十余年来の夢を実行することにしたわけだが、これまでも具体的にはなにも試みたことがなかったわけだから、永い夢だったとはいえ夢以上のものになったこともなく、書く内容についても実際始めてみなければなにもわからないのである。始めてみれば自分で自分の書くものが厭になって途中で投げ出してしまうのが一番恐い。そんなことにだけはならないように、あまり気張らないで続けていきたいが、これまで文句をつけてきた小説家よりもはるかに劣っていることが歴然として、口ほどにもないやつとすっかり軽蔑されてしまうかもしれない。しかし、なぜそんなことを敢えてするのかと問われれば、私自身はあまり好きではないのだけれども、少しでも多くの人に仏教のことを正確に知ってもらいたいと思えば、トピカルな手法を使ってでも知ってもらいたいことを書くべきであると最近は多少考えを改めてきたからである。従って、仏教のイデアを明確に表出する自信はほとんどないのであるが、仏教の私なりの見かけ（パンタスマトス）（phantasmatos）の描写（ミメーシス）（mimēsis）ができたら、それで満足しなければなるまい。

また、ついでだから、私の楽屋裏をもっとお見せしておけば、注意深い方なら既に気づいているかもしれないように、インドのことを書こうとしている私は、インドへは、実はこれまでも旅行さえしたことがないのである。それは、端的に言えば、私はヒンドゥーイズムのインドは嫌いだからなのであるが、インドの描写には、このことは確かに不利となろう。しかし、私はこの不利を仏教を描くための利点に変えたいと思っている。また、この小説の語り手はアッサジだと先に述

べたが、私――平山茂道がこれを最後に再登場することはないと断定する自信もない。できる限り、アッサジ一人に語り継がせたいと思っているが、どうしても解説が必要な時には、私が割って入ってくることがあるかもしれない。

ただし、原則的にいえば、私が登場するのはこれで最後かもしれないので、先が長くないかもしれない将来のことについて、一言だけ触れておきたい。芥川龍之介の死ぬ前年に生まれた私は、昭和と共に生きてきたが、昭和が終った時には、天皇とは全く関係なく、自分の人生も終ったような感慨に捉えられてしまった。すると、私の若いころのことばかりが脳裏を掠めるようになって、もうどうにでもいいような気持になったこともしばしばである。五つ若い私の女房はいつもそういう投げ遣りな私を支えてきてくれた。自分はできるだけ長生きできるように一生懸命生きるのだと女房は言う。私も今では、五つ年長の私が女房を見取ることができるくらいに生きようと願うことが、これまで迷惑をかけ続けてきた女房に対する愛情であると思うに至っている。今頃になって小説を書いて、たとえ世間のもの笑いになろうとも、長生きできるようにと思うくらいに、小説もできれば長続きしたいものである。来年は長男が亡くなってから満二十年の年に当る。

（一九九五年七月八日末完）